共立女子大学コレクション

「涼」を招く

平成27年6月13日(土)〜7月23日(木)

開館時間　9時30分〜17時30分
休館日　日曜・祝日
会　場　共立女子大学　神田一ツ橋キャンパス本館1階展示室

〒101-8437　千代田区一ツ橋2-2-1　電話03-3237-2665
東京メトロ半蔵門線、都営地下鉄三田線・新宿線「神保町」駅　A9出口　徒歩1分
東京メトロ東西線「竹橋」駅　1b出口　徒歩3分

「涼」を招く

年々暑さを増す日本の夏ではありますが、エアコンがなかった時代、人々の「涼しさ」を求める想いは現代人以上のものであったかもしれません。夏を快適に過ごすために、身の回りのものには、様々な工夫が凝らされていました。例えば江戸時代の「衣」に注目すると、素材はもとより、地色や模様にも「涼しさ」を追い求めていたことがわかります。

着物の生地には絹や麻・木綿などがありますが、上層階級では通気性や吸湿性の良さから麻が最も多く用いられ、絹では薄ものの絽や絹縮が用いられていました。これらはいずれも裏を付けずに仕立てられている点に特徴があり、麻製のものを「帷子」、絹製のものを「単衣」と呼んでいました。

地色には白が圧倒的に多く、紺、浅葱などの青系統、あるいは納戸、萌黄などの緑系統、さらには紫色などが用いられ、見た目の涼しさを求めていたことがわかります。また、模様の面でも、「涼」を誘う、水を題材とするモチーフが多く見られる他、秋草や紅葉（秋）、氷や雪（冬）をモチーフとしたものが見られ、夏であることを忘れさせようとするかのような工夫も見られます。

本展示では、このような先人たちの知恵や工夫に学び、作品の素材や色、模様に潜む「涼」を感じ取りながらご覧ください。

主な展示品

水浅葱地鵜飼模様帷子　江戸時代・19 世紀

薩摩切子印籠　江戸時代・19 世紀

流水菊模様櫛　明治～大正時代・20 世紀